

アンケート調査から見たA自治体における『集い』 ～男性の参加に焦点を当てて～

みやぎ心のケアセンター 石巻地域センター¹⁾ 一般財団法人みやぎ静心会 国見台病院²⁾
嵐 朋子¹⁾、原田 伸彦²⁾

1. はじめに

東日本大震災後、被災地ではさまざまな地域で多種多様な『集い』^{*1}が行われており、筆者が支援に入っているA自治体でもさまざまに趣向が凝らされた取り組みが実施されている。しかし、それらの取り組みに対して、参加している住民や支援者から挙がってくる声は「もっといろいろな人に参加してもらえたら」「もっと男性にも参加してもらえると良いのに」など、実施されている地区は異なってもほぼ同じ内容であった。加えて、男性が『集い』に参加しないことで孤立したり、あるいは心身の不健康状態に陥ったりすることを懸念しているという声も聞かれた。さらに、筆者自身も同様の懸念を抱いていたため、A自治体における『集い』の現状を把握する目的でアンケート調査を実施し、その結果に“男性の参加”という視点で考察を加えたので報告する。

2. 調査方法および調査対象者内訳

フェイスシートを含め4ページ、12の設問からなるアンケートを郵送にて配布。記入後の用紙は郵送にて回収（一部直接持参あり）した。調査対象はA自治体の全行政区長（仮設住宅自治会を含む）および仮設支援員、総数50名である。なお、回答者内訳は、表1のとおりである。

表1 回答者内訳 (n = 24)

役職名	政区長	6名 (25%)
	仮設支援員	17名 (71%)
	回答なし	1名 (4%)
年齢	30歳代	2名 (8%)
	40歳代	0名 (0%)
	50歳代	3名 (13%)
	60歳代	8名 (33%)
	70歳代	7名 (30%)
	80歳代	2名 (8%)
	回答なし	2名 (8%)
従事年数	【行政区長】	
	1年未満	1名 (4%)
	1年以上3年未満	4名 (17%)
	3年以上5年未満	5名 (21%)
	5年以上10年未満	1名 (4%)
	10年以上15年未満	1名 (4%)
	15年以上20年未満	0名 (0%)
	20年以上	1名 (4%)
	不明	4名 (17%)
	【仮設支援員】	
	1年未満	0名 (0%)
	1年以上3年未満	1名 (4%)
	3年以上	5名 (21%)
	不明	1名 (4%)

3. 調査期間および回収率

平成28年5月末を締め切りとして、平成28年3月に発送。回収率は50%であった。

4. 倫理的配慮

アンケート配布の際、文書にて以下について説明した。

- (1) アンケートへの回答は任意であり、回答しないことで不利益が生じることはないこと
- (2) 調査結果の公表。

なお、アンケート返送を説明内容への同意とすることも併せて記載した。

5. 設問および回答

まず、本研究では得られた回答をまとめるにあたり、『集い』の内容によって5つにカテゴライズしたことにここで触れておく。各カテゴリーの内訳は以下のとおりである。

体の健康：運動などを通じて体の健康作りを目指す活動

心の健康：創作活動などでの交流を通じて心の健康づくりを目指す活動

地区活動：地区のつながりのため（コミュニティ作りおよびその維持）の活動

イベント：コンサートなどイベントそのものを楽しむ活動

その他：上記に分類できない活動

(1) 設問1

各々が居住（担当）^{*2}している地区で定期的に行われている『集い』について選択肢と自由記載を併用して尋ねた。なお、選択肢には多くの地区で実施されている代表的な『集い』と筆者が認識しているものを用いた。その結果からは、多彩な『集い』が定期的に行われていることが良くわかる。

※1 本研究ではその目的に関係なく、複数の住民が集まって一定の時間を過ごす活動の全てを『集い』と表現している。

※2 行政区長と仮設支援員にアンケートを実施しているため、居住・担当の2つの表現を用いた。

(2) 設問2

各々が居住（担当）している地区で不定期に行われている『集い』について、自由記載を用いて尋ねた。設問1と2では体の健康を目的として実施されている『集い』の数と、心の健康を目的として実施されている『集い』の数が逆転している。

(3) 設問3

各々が居住（担当）している地区で、独自に行っている『集い』について自由記載を用いて尋ねた。大掃除など、地区の方による地区の方のための行事が大多数を占めていることが分かる。

設問1～3をまとめたものが図1である。

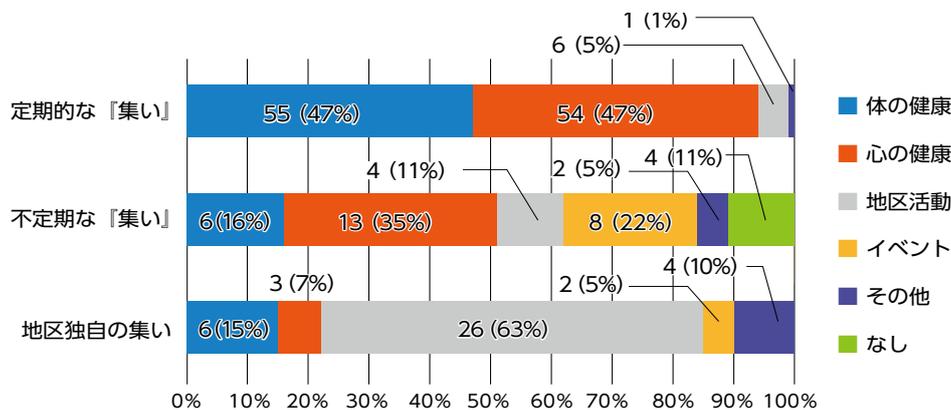


図1 定期・不定期・地区独自の『集い』

(4) 設問4

設問1～3で回答のあった『集い』へ、地区在住の男性のうち何パーセント程度が参加しているかについて尋ねた。結果は【100%～80%】地区行事、運動系、祭りなど、【70%～50%】研修旅行【40～20%】介護予防事業、カラオケ、お茶っこ会【10%以下】講話、手作り教室などであった。

クリーン作戦やお祭り、地区懇談会などの参加率が高くなっている。

(5) 設問5

『集い』への男性の参加率が高い場合と低い場合、それぞれ考えられる理由について回答者の考えを尋ねた（原文のまま記載）。

【参加率が高い場合の理由】内容に興味関心がある・物理的条件が整った場合（休日実施）・声掛けがされている・区全体で行うものであること・自分がいなければ駄目だという意識や役割があること

【参加率が低い場合の理由】内容への興味関心が薄い・女性が多く入りづらい・物理的条件（平日実施）・もともと集団に入る習慣がない

どちらの場合にも共通していることから、①興味関心が持てる内容であるか、②物理的要件（実施曜日など）が理由として大きいようである。また、男性にとって役割があるかどうかも参加を左右する要因になるようである。

(6) 設問6

各々が居住している地区の男性にもっと『集い』に参加してもらいたいと考えているかどうかについて尋ねた。結果は“はい”16（70%）：“いいえ”5（22%）であった。男性が『集い』に参加しないことを課題と考えていることがうかがえる。

なお、“はい”と回答した理由は健康に関するもの（運動不足、生活不活発病、廃用症候群など）や、孤独防止（近隣とのコミュニケーション）が挙げられた。一方“いいえ”と回答した理由はそれぞれに楽しみを持って生活しているというものであった。

2／3弱の方が“はい”と回答されており、男性の参加が少ない現状があることが分かる。また、参加されないことで心身の不健康状態に陥ることが懸念されている。

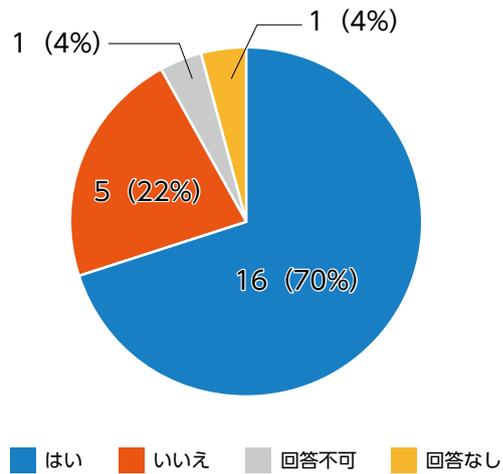


図2 地区の男性にもっと『集い』に参加してもらいたいのか

(7) 設問7

男性が『集い』に参加することの良い点について尋ね、得られた回答は以下のとおりである（原文のまま記載）。

- ・男性ならではの役割（力仕事など）を担って、会を引っ張ってくれる
- ・男性と女性の両方が参加されることで、より会が賑やかになる。また、異性との交流で男性も女性もより生き生きされる側面もあるのではないかと
- ・一杯飲みながら海の話ができる
- ・普段から顔を合わせていることで、安心感（地域の防犯・安否確認・災害時の連携など）が得られる。
- ・様々な人とのふれあいにより、家族や仕事以外の新たな人間関係ができあがるなど、より生き生きとした生活を送ることができる。

男性が参加されることで、集まり自体の活性化や、地区および個人の活性化にもつながると考えられている。

(8) 設問8

各々が居住している地区で男性だけの集まりを企画・実施しているか（実施している場合その内容も）尋ねた。結果は、“していない”16（70%）：“している”4（17%）であった。なお、実施している内容は、料理教室・麻雀・お茶っこ会・カラオケ・実業団活動・正月獅子振りであった。

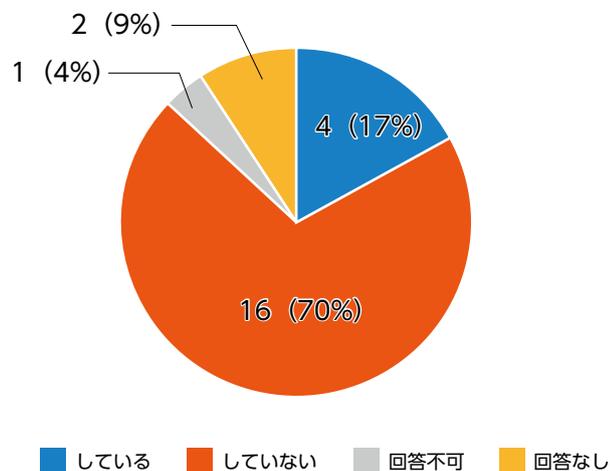


図3 男性だけの『集い』を実施しているか

(9) 設問9

設問8で“している”と回答した方に、実施した企画で好評だったものを尋ねたところ、料理教室・麻雀・お茶っこ会との回答を得た。

2人が料理教室と回答し、2人とも好評だったと回答している。震災で家族構成が変わり、男性も料理をせざるを得ない状況が背景にあるとも考えられる。

(10) 設問10

男性が参加しやすい『集い』を新たに設ける必要があると考えるか否かについて、および新たに設けるとすればどのような内容かを尋ねた。結果“はい”8(35%)と“いいえ”7(31%)がほぼ半々となった。また、それぞれの理由についても回答してもらった(原文のまま記載)。

【はいと答えた方が行うと良いと考えた内容】

- ・話し合いの場(町内、社会全体のこと等)
- ・論じるテーマを提供した飲み会
- ・料理教室
- ・検討しているが分からない

【いいえと答えた方の理由】

- ・何事にも積極的に参加されており、また行事も多い為
- ・5年も過ぎて最初から仲間に入っていなかったので入りにくいのではないか。

“はい”と“いいえ”がおおむね半々であった。必要があると思われる方がいる一方、5年経過してから新たに場を設けても参加しづらいと考える方もおられる。このことから、男性が参加しやすい『集い』であるかどうかについては、開始の時点から考えておくことも重要になると言っても良いと考える。

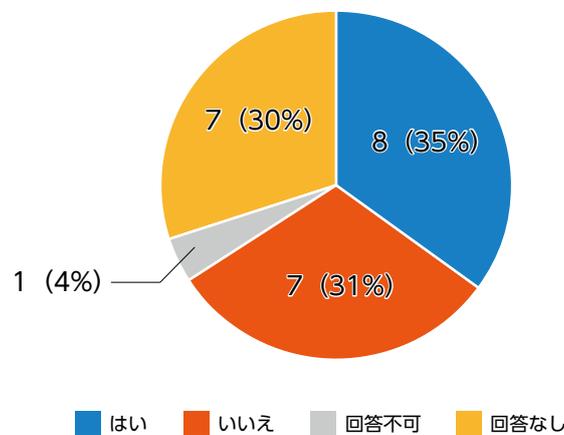


図4 男性が参加しやすい『集い』を設ける必要があるか

(11) 設問11

各地区で『集い』には参加しないが、それ以外のことを通して元気に生活している方がいるかどうかを尋ねた。結果は“いる”16(73%)：“いない”2(9%)であった。では具体的にどのような事を通じて元気に過ごしているか、については以下の回答を得た。

- ・一人でもラジオ体操をしている
- ・ウォーキング、散歩(個人・友人同士のグループで)
- ・畑仕事

圧倒的にウォーキングという回答が多数を占めた。特別な道具も必要なく手軽にはじめられることも要因であると考えられる。

(12) 設問12

設問11とは逆で、『集い』には参加せず普段の生活もあまり活発ではなく心配している方がいるかどうかと、そのような状況下にある方についてどのようなことが心配されるかを尋ねた。結果は“いる”14 (68%)：“いない”4 (20%)であった。また、“いる”と回答した方が懸念している点は以下のとおりである (原文のまま記載)。

- ・近隣との付き合いが無い
 - ・アルコールの問題 (飲んで家にいることがほとんど)
 - ・高齢化 (認知症の問題等)
 - ・すでに心身の調子を崩してしまっている
 - ・閉じこもりがちになることで、体調を崩したり、足腰が弱くなったり、精神的に元気が無くなったりと、不健康状態となってしまう
 - ・閉じこもっているため状況がつかめず、そのこと自体が心配
- 閉じこもっていること自体や、そのことに起因して起こることに対して心配に感じられているとの回答が多くを占めた。

6. 考察

アンケートの結果から、各々の地区でさまざまな『集い』が行われているものの、男性の参加がごく限られていることが分かった。また、設問6ではもっと男性に参加してもらいたいとの回答が、そう考えていないとの回答の3倍以上であったことから、より男性にとって魅力的あるいは参加しやすい『集い』の場を設ける工夫が必要になるかと考える。加えてこのような現状は、A自治体に限ったことではなく、複数の自治体で同様の課題を抱えている。そして、それぞれに男性の参加に焦点化した工夫をこらし、地域の男性たちに元気に過ごしてもらうための取り組みを実施している。^{1)~3)}これらの取り組みや今回のアンケート結果を踏まえると、男性が『集い』に参加することは、男性の健康だけではなくコミュニティの活性化という点でも意味があると言っても良いのではないだろうか。

大川⁴⁾は生活不活発病を、『I. 全身に影響するもの、II. 体の一部に起こるもの、III. 精神や神経に起こるもの、の3種類』に分けている。そのうえで「(2)の体の一部分のものだけを考えがちだが、実はIの心臓や肺の機能低下による疲れ易さ、IIIのうつ傾向や知的活動低下 (一見認知症のように見える)も重要」と述べている。実際、アンケートの回答でも、『集い』に参加しないことで心身の不調をきたすことを心配しているという回答が得られている。加えて、「生活不活発病は①『社会参加の制約』が、②『生活動作の低下』を起こし、③『心身機能の低下を起こす』」⁵⁾と述べており、アンケートの内容と一致している。そのことから、男性に外に出てもらう機会を作るとは心身ともに健康に、そしていきいきと毎日を過ごすための大切なポイントになると言って良いだろう。しかし、筆者が実施したアンケート結果からも分かるように、なかなか男性が参加されていないという現状が明らかになっていることから、「どのような内容であれば男性が参加しやすいのだろうか」という視点を忘れてはならないと考える。ただし、一方でアンケートでは「『集い』には参加していないが自分で工夫して心身の健康を維持している人がいる」という回答も決して少なくはなかったことから、『集い』に参加することだけが心身の健康に寄与するものではない、という視点も忘れてはならないという点も付け加えておきたい。

上記^{1)~3)}で触れた取り組みの特徴としては、男性のために集える場を設定しているという点である。また、アンケートの回答や上記^{1)~3)}の取り組みが生まれるきっかけともなった「女性が多いと入りづらい」という声も、男性にとって参加しやすい、あるいは参加したくなる『集い』を考える際のポイントになると考える。今回のアンケート結果からは具体的にどのような『集い』が男性にとって魅力的なものであるか、という詳細な検討までは至っていないが、いずれ機会があれば検討していきたいと考えている。

最後に今回のアンケートに協力いただいた方々、そしてA自治体の方々に心より感謝をお伝えしたい。

引用・参考文献

- 1) 東北関東大震災・共同支援ネットワーク「地域支え合い情報」編集委員会. 地域支え合い情報. 特定非営利活動法人全国コミュニティサポートセンター (CLC), Vol. 6, 2013, 3 - 8.
- 2) 東北関東大震災・共同支援ネットワーク「地域支え合い情報」編集委員会. 地域支え合い情報. 特定非営利活動法人全国コミュニティサポートセンター (CLC), Vol. 33, 2015, 3 - 4.
- 3) 東北関東大震災・共同支援ネットワーク「地域支え合い情報」編集委員会. 地域支え合い情報. 特定非営利活動法人全国コミュニティサポートセンター (CLC), Vol. 36, 2015, 3 - 5.
- 4) 東北関東大震災・共同支援ネットワーク「地域支え合い情報」編集委員会. 地域支え合い情報. 特定非営利活動法人全国コミュニティサポートセンター (CLC), Vol. 12, 2013, 14.
- 5) 大川弥生、「動かない」と人は病む～生活不活発病とは何か～、講談社現代新書、2013, 209.